汉日对照

斜阳

（日）太宰治 著
王述坤 译

日本文学“无赖派”旗手太宰治经典之作

大连理工大学出版社

014037473

H369.4:I
29

斜阳

（日）太宰治 著
王述坤 译

北京航空航天大学
藏书
图书馆

大连理工大学出版社

H369.4:I
29

北航 C1725753

图书在版编目(CIP)数据

斜阳：汉日对照 / (日) 太宰治著；王述坤译. —大连：大连理工大学出版社，2014.3
ISBN 978-7-5611-8295-6

Ⅰ. ①斜… Ⅱ. ①太… ②王… Ⅲ. ①日语—汉语—对照读物 ②短篇小说—日本—现代 Ⅳ. ①H369.4：Ⅰ

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第248945号

大连理工大学出版社出版
地址: 大连市软件园路 80 号　邮政编码: 116023
发行: 0411-84708842　邮购: 0411-84708943　传真: 0411-84701466
E-mail: dutp@dutp.cn　URL: http://www.dutp.cn
大连力佳印务有限公司印刷　　大连理工大学出版社发行

幅面尺寸: 145 mm × 210 mm　印张: 11　字数: 246 千字
印数: 1～4000
2014年3月第1版　2014年3月第1次印刷

责任编辑: 海迎新　责任校对: 邓　颖
封面设计: 董振巍

ISBN 978-7-5611-8295-6　定价: 24.00 元

译者前言

清代史学家赵翼(1727-1814)的《悼杜甫》诗有云："国家不幸诗家幸，赋到沧桑句便工"。该诗句揭示了几千年历史上经常出现的一种现象：巨大的社会灾难往往催生出优秀的文学家和卓越的诗人。1945年9月的日本，一朝脱离了军国主义淫威的控制，一切权威统统不可信了，人们的思想信仰出现了真空，处于茫然彷徨之中。在这时，"无赖派"文学率先登场，他们打着藐视权威、自由主义、人道主义的旗号，玩世不恭，沉溺酒色，否定一切。无赖派，是日本近代文学史上不容忽视的特殊流派，其共同特点有二：一是对军国主义法西斯统治不满，以鼓吹怀疑、破坏、逆反的道德观、价值观，在战后的混沌与颓废中彷徨，试图在沉沦中发现美；二是其作品都有很强的艺术性，故而拥有大量青年读者 。日本作家太宰治(1909-1948)，就是这一流派的领军人物。不可否认，"无赖派"文学对人们心中军国主义神话的崩溃起到一定的历史作用，但对现存秩序的怀疑和不满固然是人类历史进步的动力，然而怀疑者自身就是那个时代的参与者，因此，他们否定的包括自我，否定的结果往往造成对

前途和未来的迷茫。如果把握不好这种迷茫，他们就要么试图去追求并不存在的世外桃源，要么就要在沉沦中绝望而自我毁灭。太宰治就是个典型例子。

被称为“无赖派的旗手”的太宰治是一位在日本近代文学史和世界文学史上的著名作家，也是该派中影响最大的作家，同时又是最彻底实行无赖派精神的作家。虽然都叫无赖派，但因其世界观、题材、写作风格、语言运用等的不同而有种种差别，不过大致可分为两种类型：一种是其作品内容和作家的实际生活关系不大，作品内容固然消极，但作家本人并没有走向毁灭。石川淳（1899–1987）、伊藤整（1905–1969）就属于这种类型，特别是石川，其作品题材广泛，文笔华丽，是形成了自己风格的多产作家，他身上的自我意识和严肃的批判精神是其他无赖派作家所没有的，为后来的安部公房（1924–1993）、三岛由纪夫（1925–1970）、大江健三郎（1935–）等新锐作家起了先驱作用；另一种可谓真正的无赖派，他们的作品和他们的实际生活不仅一致，而且，双方的堕落处于同步连动关系，最后本人走向毁灭。太宰治、坂口安吾（1906–1955）、织田作之助（1913–1947）、田中英光（1913–1949）等属于这一类型。

不可否认，作为无赖派的“旗手”，太宰不失为一位才华横溢的优秀作家，他对病态社会的批判，对虚伪人类的嘲笑，自我剖析的诚实，对自己罪恶的唾弃，对自由、真实、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

善良的追求，都是他文学的闪光点，都有其伟大的历史意义。唯其如此，他的文学尽管一直存在争议，读者群仍有增无减。在日本近代文学史上，太宰所占地位几乎接近夏目漱石（1867-1916）、森鸥外（1862-1922）等文豪，研究太宰文学的学者人数也不亚于研究漱石、鸥外文学的人数。包括日本和我国在内的各国文学界，不仅有大量太宰治作品的原版作品和译本出版发行,而且关于太宰治的作家论、作品论也浩如烟海，各种观点林林总总，五花八门。有的人对太宰以及太宰文学“抱有的厌恶情绪异常强烈”（三岛由纪夫），但也有的人把太宰文学誉为“昭和文学不灭的金字塔”（鸟居邦朗）。特别是2009年其诞辰100周年，日本又掀起一股重新认识太宰文学的浪潮，其作品《斜阳》《潘多拉宝盒》《人间失格》《维荣之妻》被搬上银幕或荧屏，使太宰文学的研究热上加热。

本书《斜阳》是太宰的代表作之一，太宰对战后社会变化的流于形式持批判态度，对人的本质的顽冥不化心灰意冷，认为要进行“人的内心深处的革命”“就需要美丽的灭亡”。小说是以和太宰有关系（情人之一）的太田静子的日记为素材写成的，完成于1947年2月。主人公和子因故离婚回了娘家，相依为命的贵族母女在东京活不下去了，搬迁到偏僻的伊豆的山庄开始落寞的生活。之前染上毒瘾的弟弟直治当兵后杳无音信，最近从南方岛屿回家来了，但仍然离不

开毒品，跟着颓废派小说家上原鬼混仍然过着堕落不堪的生活。“最后的贵族”母亲病逝后，有感于自己罪恶的深重，并沉迷于喝酒和毒品的弟弟在苦恼中绝望而自杀。和子认为上原和弟弟都是旧道德的牺牲品，她决心和旧道德斗争，要生下和上原的私生子，从而完成“道德革命”。文中的这个家庭暗喻经过战后“农地改革”后变穷了的太宰的家庭，登场的四个人物身上都有太宰治的影子，更多的则是直治。值得注意的是，作家在小说中留下了一线光明——和子决心活下去为道德革命而斗争，这反映了写作当时（1947年初）作家的心态，这和《维荣之妻》中女主人公说的话“即使贱为人渣，只要能活着就好啊！”寓意相同。

然而，9个月后的太宰心态的变化我们可以从太宰的另一部作品《人间失格》里清晰地看到。自幼体弱多病的叶藏不理解人类的行动，对人感到不安和恐怖，用“搞笑”来排解对人类的恐惧，并作为向世间最后的求爱。中学时的故意搞笑被同学竹一看破而沮丧，竹一预言他要“招女人迷恋”和“成为伟大的画家”。但此后画塾同学堀木让他认识了烟、酒、妓女和左翼运动，叶藏靠此来排解对人的惧怕。和吧女情死而自己被救活，接着沦为女记者和老板娘的男妾，再后来和不懂得怀疑人的清纯少女芳子结了婚，芳子却被不良商人奸污。感到自己的无能和罪过的叶藏服毒自杀未遂，为了戒酒却染上了吗啡毒瘾，从而又和药店老板娘结下丑陋关

系。被送进精神病院一段时间后，成一个废人被送回故乡。由于《斜阳》一跃成为一流作家的太宰，对战后的人和社会的绝望达到极限，《人间失格》是太宰文学的总决算，这部作品是从1947年3月10日开始写的，实际上是太宰心理世界的直白。他以必死的精神深挖自己的内心苦恼和纠结，将本质上游离于现世的孤独者对爱的诉求写得淋漓尽致。

要谈本人在翻译过程中的感觉，觉得比以前翻译谷崎润一郎、野上弥生子、坂口安吾、野间宏、武田泰淳、庄野润三等作家的作品，在遣词造句的斟酌上有些吃力。如让笔者归纳太宰作品文字的特点，一是大约因太宰是学法文的，其语言文字不甚规范，受西方语言一定影响，句与句有时连贯性不强，定语过长、句子过长的现象较为普遍，不仅需要在翻译技巧上活用加译、减译、倒译、折译、分译等手法，而且在译汉后前后文脉的“理气”上也颇费功夫；二是太宰习惯于重复使用某些词汇。比如，《斜阳》《人间失格》两部作品中都有大量的“寂しい”，固然在原文中该词汇表达了作者的意图，但当然不能一律译成“寂寞”了之，以我们祖国语言词汇的丰富，需要一一区别对待，仔细斟酌用哪个汉语词汇表现才最恰当。老实说有的地方恐怕就是现在，拙译案也未必敢说十分准确。对这种译事的甘苦，各种译本的诸位译者可能都会有深刻体会吧；三是由于太宰治本人文学、艺术、宗教等方面功底极为深厚、知识面极宽，小说中不仅

涉及大量人名、地名、作品名、世界名画等，还出现一些作品中人物名，而且涉及政经、哲学、圣经等经典文献以及史上著名的一些诗、和歌、俳句或歌曲歌词，往往使没有这方面知识储备的读者不得要领，难免影响对作品精神的深刻理解。为帮助读者朋友加深对小说内容的理解，笔者对读者可能不甚明了的一些圣经内容、和歌、歌词、书名、书的内容以及作家的影射等均作了比较详细、溯本求源的注脚。以上的第三点就算是不同于以往译本的一点特色吧。

最后，在译稿中文的校阅和注脚的电脑处理上，南京大学硕士研究生池源同学牺牲宝贵时间，提出不少有益的意见，认真地做了大量工作，在此深表谢忱。拙译究竟能否在一定程度上传达出原作的“形”和“神”，还有赖于读者朋友的检验。尽管经过了多次修改加工，但因本人水平所限，错误谬误仍然在所难免，敬请日本文学翻译界、研究界前辈、同仁以及诸位读者朋友给予指正。

王述坤

2013年12月

斜　陽

一

朝、食堂でスウプを一さじ、すっと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽(かす)かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スウプに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スウプをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スウプを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお

食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらっしゃる。弟の直治がいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向ってこう言った事がある。

「爵位があるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持っている立派な貴族のひともあるし、おれたちのように爵位だけは持っていても、貴族どころか、賤民にちかいのもいる。岩島なんてのは（と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて）あんなのは、まったく、新宿の遊廓の客引き番頭よりも、もっとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井（と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて）の兄貴の結婚式に、あんちきしょう、タキシイドなんか着て、なんだってまた、タキシイドなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テーブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかったのには、げっとなった。気取るという事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあったものだけれども、じっさい華族なんてものの大部分は、高等御乞食とでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

は、まあ、ママくらいのものだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある」

スウプのいただきかたにしても、私たちなら、お皿の上にすこしうつむき、そうしてスプウンを横に持ってスウプを掬い、スプウンを横にしたまま口元に運んでいただくのだけれども、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁にかけて、上体をかがめる事も無く、お顔をしゃんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプウンを横にしてさっと掬って、それから、燕のように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかにスプウンをお口と直角になるように持ち運んで、スプウンの尖端から、スウプをお唇のあいだに流し込むのである。そうして、無心そうにあちこち傍見などなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプウンをあつかい、スウプを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちっともお立てにならぬのだ。それは所謂正式礼法にかなったいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛らしく、それこそほんものみたいに見える。また、事実、お飲物は、口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども、私は直治の言うような高等御乞食なのだから、お母さまのようにあんなに軽く無雑作にスプウンをあやつ

る事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上にうつむき、所謂正式礼法どおりの陰気ないただき方をしているのである。

スウプに限らず、お母さまの食事のいただき方は、頗(すこぶ)る礼法にはずれている。お肉が出ると、ナイフとフオクで、さっさと全部小さく切りわけてしまって、それからナイフを捨て、フオクを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフオクに刺してゆっくり楽しそうに召し上がっていらっしゃる。また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひょいと指先で骨のところをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらっしゃる。そんな野蛮な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、ランチのお菜(さい)のハムやソセージなども、ひょいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。

「おむすびが、どうしておいしいのだか、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ」

とおっしゃった事もある。

本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う

事があるけれど、私のような高等御乞食が、下手に真似(まね)してそれをやったら、それこそほんものの乞食の図になってしまいそうな気もするので我慢している。

弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなものをさえ感じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐(きつね)の嫁入りと鼠(ねずみ)の嫁入りとは、お嫁のお支度がどうちがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍(そば)の萩(はぎ)のしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もっとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」

とおっしゃった。

「お花を折っていらっしゃる」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ」

とおっしゃった。

ちっともしゃがんでいらっしゃらないのには驚いたが、

けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあった。

けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃったけれど、こないだ或(あ)る本で読んで、ルイ王朝の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅(すみ)などで、平気でおしっこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのようなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなかろうかと考えた。

さて、けさは、スウプを一さじお吸いになって、あ、と小さい声をお挙げになったので、髪の毛？とおたずねすると、いいえ、とお答えになる。

「塩辛かったかしら」

けさのスウプは、こないだアメリカから配給になった罐詰(かんづめ)のグリンピイスを裏ごしして、私がポタージュみたいに作ったもので、もともとお料理には自信が無いので、お母さまに、いいえ、と言われても、なおも、はらはらしてそうたずねた。

「お上手に出来ました」

お母さまは、まじめにそう言い、スウプをすまして、それからお海苔(のり)で包んだおむすびを手でつまんでおあがりになった。

私は小さい時から、朝ごはんがおいしくなく、十時頃に

ならなければ、おなかがすかないので、その時も、スウプだけはどうやらすましたけれども、食べるのがたいぎで、おむすびをお皿に載せて、それにお箸を突込み、ぐしゃぐしゃにこわして、それから、その一かけらをお箸でつまみ上げ、お母さまがスウプを召し上る時のスプウンみたいに、お箸をお口と直角にして、まるで小鳥に餌をやるような工合いにお口に押し込み、のろのろといただいているうちに、お母さまはもうお食事を全部すましてしまって、そっとお立ちになり、朝日の当っている壁にお背中をもたせかけ、しばらく黙って私のお食事の仕方を見ていらして、

「かず子は、まだ、駄目なのね。朝御飯が一番おいしくなるようにならなければ」

とおっしゃった。

「お母さまは？おいしいの？」

「そりゃもう。私は病人じゃないもの」

「かず子だって、病人じゃないわ」

「だめ、だめ」

お母さまは、淋しそうに笑って首を振った。

私は五年前に、肺病という事になって、寝込んだ事があったけれども、あれは、わがまま病だったという事を私は知っている。けれども、お母さまのこないだの御病気は、

あれこそ本当に心配な、哀(かな)しい御病気だった。だのに、お母さまは、私の事ばかり心配していらっしゃる。

「あ」

と私が言った。

「なに？」

とこんどは、お母さまのほうでたずねる。

顔を見合せ、何か、すっかりわかり合ったものを感じて、うふふと私が笑うと、お母さまも、にっこりお笑いになった。

何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうっと、六年前の私の離婚の時の事が色あざやかに思い浮んで来て、たまらなくなり、思わず、あ、と言ってしまったのだが、お母さまの場合は、どうなのだろう。まさかお母さまに、私のような恥ずかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。

「お母さまも、さっき、何かお思い出しになったのでしょう？どんな事？」

「忘れたわ」

「私の事？」

「いいえ」

「直治の事？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com